黄金時代

黄金時代

椎名誠

江苏工业学院图书馆
藏书章

文藝春秋

黄金時代

一九九八年五月三十日　第一刷

（定価はカバーに表示してあります）

著者　椎名誠

発行者　和田宏

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表（〇三）三二六五―一二一一

印刷　大日本印刷

製本　矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は送料当社負担でお取替致します。小社営業部宛お送り下さい

ISBN4-16-317750-7
©SHIINA MAKOTO 1998 Printed in Japan

目次

砂の章　5
風の章　71
草の章　135
火の章　199

装幀　菊地信義

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

黄金時代

砂の章

人を殴るというのは怖いけれど、怖いのは殴る直前までのことで、いったん拳を振り回し、それがよほど焦って狙いがはずれ、思わぬところに当ってしまったとしても、無為に空を切ってたたらを踏んだりしないかぎり、怖さの一瞬後には随分気持が軽くなってしまうものだ。

おれがはじめて人を殴ったのは中学三年の春で、相手は角田という同じ中学のサッカー部の主将であり、首領だった。当時おれのいた中学は、もし戦後中学史のようなものが書かれたとしたら、荒れる中学第一期のまさしくアケボノの時代にあって、教室の黒板や漆喰壁は自称空手使いや喧嘩名人によってずたぼろの穴だらけになっていた。野球やサッカーなどの集団プレーの運動クラブは、そういう闘争好きの、まあ言ってみれば不良チームによって占領されていて、主将イコール首領というのはわかり易い役割の図式であった。

角田はその中学の番長グループの副番格で、その名前のように角張っていかにも頑丈そうな顔をしていた。漁師の倅で小学生の頃から網巻きの手伝いなどをやっており、黒くて太い腕をして

いた。サッカーをやっているから当然蹴る威力もある。
そういう奴と対決した。理由はとくになかった。番長グループに属さず、かといって穏和な進学勉強派でもなく、数人の仲間と好きなことをしていた日頃の立居振舞いが、かれらには気に入らなかったのだろう。
三年になってまだ間もない四月のある日、番長グループの一人がいきなり迎えにきた。油工場の跡地で待っているから、と。
そこはかなり広い松林を切り拓いてぽつりぽつりと家が建ちはじめている通称ボールド山と呼ばれているところであった。山といってもとくに目に見えて起伏がある訳ではない。かつてその一角に菜種から採る油工場があって、数年前に火事を出して全焼した。ボイラーが爆発し、そばにいた経営者の息子の工場長が全身火だるまになり、近くの芋畑をころげ回った。体の火を消そうとしたのだが、結局焼死した。着ていた作業服に油が染み込んでいて、いつまでも燃えていたらしい。全焼した工場跡は一応片付けられたが整地されないままで、四辺を囲んでいるコンクリートの塀がいい目隠しになった。
三十人ほどの不良どもがおれと角田をとり囲んでいた。話らしい話もないままに、角田はいきなり自分の鞄を投げつけてきた。突然だったので少々怯んだおれの眼前に角田の蹴りがきた。力を込めた飛び込み気味の前蹴りだったが、それが当っていたらおれは間違いなく鼻か顎のあたりを撃たれ、転倒してあっけなく戦意を喪失していたのだろう。でも当らなかった。当れば効果的なこの角田の先制攻撃がはずれたために、おれの人生の進むべき方向の何かが少し変った。喧嘩

とはそういうものなのだろう。
よく見ると角田はサッカーシューズを履いていた。あれがまともに当っていたらおれの顎は砕けていたかもしれない。不思議なことにもう恐怖はなかった。恐怖よりもあつい怒りの塊がいきなり胸や腹に充満した。あんなもので蹴り殺されてたまるか。
おれは突進していた。どんなふうに拳をふり回したのか記憶はないが、接近していって最初にぶん回した拳のひとつが角田の顔のどこかひどく固くて手ごたえのある場所を撃った。あとでそれが角田の目と目の間であるということがわかった。急所のひとつである。角田の動きがとまり、おれはさらに怒りを膨らませていた。
「のし」と呼ばれる牛のような体軀をした番長がでてきておれと角田を分けた。
「互角だっちゃ、まだやるけ」
のしは漁師町の方言そのままで低く言った。角田の片目から血が流れ出ていた。おれも顔のどこかがひどく熱く、そして痛かった。
角田が唾を吐いた。もうこれ以上たいしてやる気はない、という「引き」の意識を感じた。なんだこの野郎こんな程度か、と思ったとき、いきなり目の前が赤く炸裂した。自分の鼻が陥没し、口蓋の内側に鼻がそっくりのめり込んできたような気がした。続いていろんな奴のいくつものパンチがおれの顔や腹を激しく撃った。おれは一回転して転倒し、その上を今度はいくつもの靴が襲ってきた。もう自分の鼻は顔の中にめり込んでしまったのだろうが、しかしこれ以上顔は撃たれたくない、と思ったので、おれは自然に体を丸め、両方の腕で顔の前面を防御した。丸まった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

腹の奥に金属鋲のついた靴が一撃強く叩き込まれたのがわかった。おれを殴って蹴る十数人の中に角田がいるのがわかった。おれの鼻を最初に殴りつけたのは「のし」に違いない。

「この野郎。金玉ちぢめやがって」

体を丸めているおれの頭の上で「のし」が言った。また唾が吐きつけられた。結着を意味することらしい。唾は「のし」の吐いたものらしかった。

一味は動けなくなったおれを残し、盗賊が引くように一瞬のうちに去っていった。

おれの鼻は陥没していなかったが、顔の腫れは半月程ひかなかった。それまで殴りあいの喧嘩をしたことのなかったおれは、その日決闘とリンチというものをいっぺんに経験した。喧嘩は怖しいものと思っていたが、拳の一発が当った段階でもう恐怖も何もなくなり、かえって煮えたぎる怒りのあつさが妙に心地いいものだ、ということを知った。同時に角田とのしをこのままにしておくものか、と思った。そのためにやるべきことがいきなり見えてきた。

その町は海に面して扇状に横に広がっていた。長い海岸線に沿って黒く引きしまった砂の海岸が続き、町の中心部を流れて海岸に注ぐ舵骨川の河口を挟んで、海水浴や汐干狩にやってくる客のためにいくつもの海の家が並んでいた。その中の少々くたびれ気味の造作の「ちどり」という海の家を訪ねた。

まだ汐干狩のシーズン前なので、どこの海の家も閉鎖されたままだったが「ちどり」には男が一人住んでいた。夏になると客のために使う休憩所の奥に、戸板やベニヤで囲った狭い居住部屋

をつくり、その中で、男は薄汚れて汐くさい布団にくるまって寝起きしていた。男が「ちどり」にそうしていられるのは「ちどり」の経営者の従弟だったからだ。「ちどり」の経営者はおれの家と親戚関係にあった。海の家が開く六月のはじめには男はそこを追いだされる。男の名はゆうさんといった。「おれもちどりみてえな渡り鳥だよ」とゆうさんはけっこうそのセリフが好きだったらしく笑いながらよく言った。

ゆうさんと初めて会ったのは、その町に引っ越してきた日だった。おれの家がその町にやってきたのも「ちどり」の経営者の手引きがあったからで、引っ越しの日にゆうさんが手伝いにきてくれた。

ゆうさんの肩と腕には線画だけの刺青があり、絵柄は菩薩と雲だった。しかしその雲は荒海の波のようにも見えるので、裸になるとゆうさんはいちいちそれを説明する。

「波じゃあなくて雲なんだからよお、先生」

先生と呼ばれたのは、公認会計士をしているおれの父親である。ゆうさんの刺青は千倉にいた頃入れたらしい。

引っ越しの晩の酒宴でゆうさんは褌ひとつになって磯節というものをうたって踊った。しんばり棒を船の櫂にみたててそれを振り回し、新しい硝子を一枚割った。

みんなが酔いつぶれてぐっすり寝入ったその晩に泥棒が入り、窓の近くに寝ていた長兄の財布をとられ、お櫃に半分近く残っていた引っ越し祝いの赤飯をそっくり食われてしまった。

その朝泥棒に入られたのは、もうそれそのものは必要ないけれど、泥棒よけのおまじないでも

あるしんばり棒をゆうさんが振り回して硝子を割ったからですよ、と母親が露骨に嫌な顔をしたが、父親は被害もたかがしれていたのだからと、その早々の泥棒の来客をかえってよろこんでいたくらいだった。しかしその父親も越してきて五年もしないうちにあっけなく脳溢血で逝ってしまった。父親の葬儀の時もゆうさんは手伝いにきた。

ゆうさんはおれの父親と妙にうまがあったようで、引っ越しを手伝ってくれたあと、よく家にやってきて父親と酒をのんでいた。呑み代がわりに庭の木の植え替えを手伝ったり、池をつくりにやってきた。しかしゆうさんのつくった池に金魚を入れるとそれがすべて死んでしまった。水を張ってすぐのうちはセメントからアクが出るので、しばらく魚を入れてはいけないんだということを誰も知らなかったのだ。

父が死んでからゆうさんの足は遠のいたが、いろいろ面白い話が聞けるので、おれはよく「ちどり」へ遊びに行った。

「喧嘩が強くなりたいんだ」

とおれはその日ゆうさんに言った。

「おめえ背だけだいぶでっかくなったな」

小部屋をしきる戸板の前に七厘があって練炭が燃えていた。汐にやられたのか酒ののみすぎかわからなかったがゆうさんはいつも目が赤い。

「誰かに殴られたのか」

角田とのことがあって一カ月たっても、おれの鼻の付け根のところには青黒い痣が残っていた。

ゆうさんの赤目が目ざとくそれを見つけていた。
「殴られただけじゃない。こっちも殴った」
七厘の隣に口を開いた蛤がいくつも転がっていた。牛乳瓶の中に醤油らしいものが半分ほど溜っている。雲が低く降りてきているので浜のアオサの臭いがきつかった。海の家は木の桟橋状のもので浜とつながっている。「ちどり」はほかの海の家よりも規模は小さかったが、その分気負って鼻面を突きだすようにして一番先端まで高床式の建物が海上に出張っている。汐が満ちてくると、柱を洗う波の音が大きかった。
「喧嘩はよ、先に殴んなくちゃ駄目なんだよ。金玉でもなんでも蹴りあげて野郎を動けなくしてそれから、が喧嘩なんだよ」
「だからおしえてくれ」
ゆうさんは七厘のそばの蛤の殻をぞんざいに掬いあげて海に捨て、両手を払ってから手洟をかんだ。おれの頼んでいることにあまり興味はないようだった。
ゆうさんのところに遊びにきていろいろ聞いた話の中では、ゆうさんが房総の千倉にいた時、三人の朝鮮人と喧嘩した話におれは一番昂奮した。朝鮮人の頭突きと喧嘩根性はものすごくて、その時ゆうさんの右の耳たぶが千切れてしまった。傷跡が残っているだけに、千倉の呑み屋街の細長い仮設便所を倒して一人を下敷きにし、なんとか逃げのびたゆうさんの話を息を詰めるようにして聞き入った。その話は同じ中学の策次とアームの三人で聞いた。
「話聞いてるだけじゃ喧嘩に勝てねえよ」

面倒くさそうにゆうさんは言った。
「だから喧嘩をおしえてくれ」
ゆうさんはそれには返事をせず黙って薄暗い寝場所に入り、やかんを持って出てきた。《ちどり専用》とやかんの腹のところに赤ペンキで大書きしてある。やかんをゆすって七厘の上にのせ、あっちこっちだらしなくたるんでいるトックリのセーターの首のところから片手を入れて、胸のあたりをひとしきり掻いた。ゆうさんは機嫌が悪かった。赤い目は体のどこかが悪いからかもしれない、とその時はじめて思った。
「金を払うか」
と、ゆうさんはいきなり言った。おれは一瞬言葉に詰まり、なんのことだ、と思った。
「月謝だよ。金払うか」
ゆうさんの赤い目は思いがけず本気だった。

中学三年はA組からF組まで六クラスあって、おれはF組だった。担任教師は御手洗静雄といった。「みたらい」と読むのだが、生徒たちは躊躇なくべんじょ先生と呼んだ。音楽が担当で、煮干しを連想させる異様に内側にこびりついた痩せかたをしていて、そのミイラ顔の目は生徒たちを常に露骨に軽蔑していた。生徒たちもそれはわかっていたからべんじょ先生の音楽の授業になると、ごく少数の進学一途組を除いて、男子生徒の殆どはただ教室にいる、というだけで何も聞いていなかった。

かといって特に札つきのワルがいるという訳でもなく、三年で最も問題の多いクラスは「のし」のいるB組と、サッカー部員が一番集まっているC組で、そこでは授業中に生徒が煙草を喫っていることも稀ではないようだった。

リンチにあった後、自分のクラスにあの日おれを殴った奴がいたのかどうか、ということを落着いて考えた。野球部とサッカー部の生徒は一人ずついたが、あの日おれをとり囲むまわりにいたのかどうかはわからなかった。とり囲まれた時、気持はまるっきり逆上していた。下級生もいたし、一人一人の確認などできなかった。

角田とやってケリがつかず、結局全員のリンチにあった、ということはクラスの殆どが知っているようだったが、同じクラスに親しく話ができる友人は誰もいなかった。

小学校で仲のよかった策次とアームが隣のクラスにいた。その策次とアームがおしえてくれた。

「いろいろ聞いたところによるとよ、おめえを殴ったほうがいいとのしたちに言ったのはデブ久だってよ」

久山は同じクラスだったが三年で転校してきたのでどんな奴なのかよくわからない。大柄のデブで首を振りながらくねくね歩く。廊下などで時おりわざとぶつかってきた。かといってそれで喧嘩を売る訳ではない。常にひとを小馬鹿にしたようなふくらんだ顔が嫌いだったのでおれはそいつをまったく無視していた。どっちにしたってとるに足りない奴だ、と考えていた。

「本当かよ。誰に聞いた？」

「けっこうみんな知ってるんだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com